

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：32401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17324

研究課題名（和文）高校中途退学を予防する包括的プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of Comprehensive Program to Prevent High School Dropout

研究代表者

小栗 貴弘 (OGURI, Takahiro)

跡見学園女子大学・心理学部・准教授

研究者番号：10635379

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、高校中退における予防プログラムを「普遍的予防」「選択的予防」「指示的予防」に分類し、包括的な予防プログラムの開発を目的とした。普遍的予防では、学習スキル教育の開発を行った。学習に困難を抱える高校生を対象として、流暢性に焦点を当てた学習スキルを教示し、効果を確認した。選択的予防では、中退の高リスク群をスクリーニングする尺度として、6因子35項目で構成される尺度を作成し、「高校中退リスク評価尺度(RAS-HD)」と命名した。指示的予防では、事例研究を通して、連携による学校適応支援やキャリア支援の効果を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文部科学省(2014)によれば、平成25年度の高校中途退学者数は約6万人であり、在籍者に占める中途退学者の割合(中退率)は1.7%であった。こうした高校中退者について、埼玉県教育委員会(2011)は中退の翌年に追跡調査を行い、中退者の半数以上が「社会的弱者」のままであったと報告している。このような現状について内閣府(2010)は、高校中退が社会的弱者に至る高いリスク要因になるとし、在学中における早い段階から高校が計画的に支援を行っていくことの必要性を指摘している。そこで、本研究ではさまざまなレベルで高校中退を予防するプログラムを開発し、その効果を検証した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a comprehensive prevention program for high school dropout. First, the prevention program was classified into “universal prevention”, “selective prevention” and “indicated prevention”. In the universal prevention, we developed the study skill education program. We targeted high school students with learning difficulties and taught them study skill focusing on fluency, and confirmed the effects. In selective prevention, we developed a scale consisting of 6 factors and 35 items as a scale for screening a high-risk group for dropout, and called the “RAS-HD: Risk Assessment Scale for High School Dropout”. In indicated prevention, we confirmed the effects of collaboration for school adaptation support and career support through a case study.

研究分野：臨床心理学

キーワード：高校中退 高校中退リスク評価尺度 学習スキル 普遍的予防 選択的予防 指示的予防

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 高校中退の現状

文部科学省(2014)によれば、平成25年度の高等学校(以下、高校と略記)において中途退学(以下、中退と略記)した生徒の数は全国で約6万人に上り、高校中退率は1.7%であった。単位制を除いて学年別に見てみると、全中退者のうち半分以上が1年生の間に中退していた。高校を中退した生徒についての追跡調査の一つに、東京都教育委員会(2013)のものがある。東京都教育委員会(2013)では、平成22年度と平成23年度に都立高校を中退した生徒5526名に対し、平成24年7月~11月に追跡調査を行い、20.4%の中退者から回答を得ている。それによると、調査時点でフリーターまたはニートだった中退者は47.6%であった。回答が得られなかった残りの8割の中退者を考慮すれば、この数値はさらに上がることが予想されよう。このような中退の状況について、内閣府(2010)は「高校中退は、フリーターや若者無業者など社会的弱者に至るリスクが高く」、高校は「在学中における早い段階から計画的に支援を行っていくことが必要」と指摘している。

#### (2) 高校中退における予防的介入

こうした高校中退を予防する上で参考となるのが、Patricia & Robert(1994)が提唱する精神保健介入スペクトラムという考え方である。この中では予防を、リスク集団を同定せず全ての集団に予防的介入を行なう普遍的予防、問題の兆候は示していないものの何らかのリスクが高い集団へ予防的介入を行なう選択的予防、問題の兆候を示し始めている人へ予防的介入を行なう指示的予防の三段階に分けている。

小栗(2014)では、これらの概念を参考にしながら、高校中退予防における予防的介入が以下のように定義されている。

普遍的予防とは、全ての生徒を対象とする介入であり、学習スキルや対人関係スキルに関する授業を言う。

選択的予防とは、欠席や問題行動といった中退の兆候は示していないものの、スクリーニング・テストにおいて高リスク群と判断された生徒に対して行なう、個別の支援や日常生活での配慮を言う。

指示的予防とは、中退には至っていないものの、不登校、いじめ、障害、非行など、中退に至る兆候を示している生徒に対して行なう、個別の支援のことを言う。

#### (3) 普遍的予防としてのソーシャルスキルトレーニング

高校中退の主な原因となり得る友人関係への予防的介入の一つとして、ソーシャルスキルトレーニング(Social Skills Training; 以下、SSTと略記)が挙げられ、それは小栗(2014)による高校中退予防の定義によれば普遍的予防と言える。ソーシャルスキルとは「対人関係を円滑に運ぶための知識とそれに裏打ちされた具体的な技術やコツ」のことである(相川・佐藤,2006)。近年では中退予防を目的とした高校生対象のSSTの知見が蓄積されてきている。しかし、問題点が二つ挙げられる。一つめはSSTの実施方法であり、二つめは効果評価のための尺度である。一般的にSSTはロールプレイやグループワークを取り入れている。しかし、嶋田・坂井・菅野・山崎(2010)も指摘するように、人間関係でつまづいた経験のある生徒が、他の生徒の前で演じるということは、それ自体が嫌悪場面となる可能性がある。そこで、演じなくても済むように、小栗(2015)ではワークシートを用いたSSTを作成している。この作成したSSTの利用可能性を高めるためには、ワークシートを用いたSSTを現場の教員が実施しても効果が認められるのかを、明らかにする必要がある。また、SSTの効果を測定する場合、SSTの事前・事後の評価に用いる尺度が必要となってくる。しかし、高校生を対象としたSSTの効果を評価するという点で信頼性や妥当性の確認されている尺度は、筆者の知る限りでは作成されていない。

#### (4) 普遍的予防としての学習スキル教育

先述のように、普遍的予防には学習スキルの授業が含まれる。これは、多くの調査や先行研究が高校中退と学業不振の関連を指摘しているためである。学習スキルとは「課題に対する学習のやり方」のことを言う(西村・河村,2010)。学習スキルについて、市川(2004)は「ノートとり」のように授業中に必要とされるもの以外に、「予習、復習、試験勉強など、授業以外の学習行動に関するものも、学年が上がるにつれて、しだいに重要」になるとしている。しかしながら、学習スキルは「ある程度教わったり、自分で工夫したり」しないと身につかない上に、教師自身も学習スキルを伝えようとするのは「ほとんどないのが現状」であり、その結果として「中学生、高校生になって、勉強しても成績が上がらず、意欲をなくしてしまう」と指摘している。一方で、Binder(1996)は学習した効果の維持、耐久性において、行動の流暢性指導の重要性を指摘している。つまり、単に反復するだけでなく、それが「流暢に」されなければ、学習した内容が維持されないということになる。学習につまづきがある高校生の中には、発達の偏りを抱えている生徒も少なからず含まれていることが推測され、その場合は流暢に漢字を書き写せない可能性がある。そうすると、「漢字を何度書いても覚えられない」ということになり、学業不振やモチベーションの低下につながりやすいと考えられる。

#### (5) 選択的予防で使うスクリーニング尺度

高校中退の選択的予防では、予防的介入の事前評価および効果評価に用いるスクリーニング・テストが必要となってくる。ところが、高校中退リスクを評価するという点で信頼性や妥当性が確認されており、さらに標準化されている尺度は、筆者の知る限りでは開発されていない。たとえば、高校生の学校適応を測定する上で用いられている尺度に、河村(1999)の「学校生活満足

度尺度」,太田(2002)の「高等学校新入生用適応感尺度」,新井・古河・浅川(2009)の「高校生用学校適応感尺度」などがあるが,これらのいずれも高校中退との関連については検討していない。さらに,先行研究において Suh et al.(2007)は「低い社会経済的背景」,竹綱他(2009)は「親との関係」を中退要因として挙げているものの,これらに関する項目は上に挙げた尺度の中には含まれていない。

#### (6) 指示的予防としての学校適応支援とキャリア支援

指示的予防と位置づけられている個別的な支援は,これまで事例研究として蓄積されてきている。しかし,中学生に対する再登校支援の研究と比較して,高校生の事例研究はまだ少ないのが現状である。その上,高校における中退予防の支援は,義務教育における再登校支援とは異なる視点が必要であると考えられる。たとえば,高校での不登校対応や中退予防がキャリア支援と密接に関連していることが指摘されている。これらの先行研究を踏まえ,本研究では高校中退予防におけるキャリア支援を「進学や就労といった社会的自立に向けたプロセスの支援」と定義し,義務教育での再登校支援になかった新たな視点として検討する。

## 2. 研究の目的

### (1) 普遍的予防としてのソーシャルスキルトレーニング

ソーシャルスキル評価尺度を作成し,その信頼性および妥当性を検討することを目的とする。

ワークシートを用いた SST を作成し,教員が実施する。そして,ソーシャルスキル評価尺度を用いて,SST の効果を検討する。

### (2) 普遍的予防としての学習スキル教育

高校中退の普遍的予防のためのアナログ研究として,短大生を対象に,漢字学習における学習スキルのユニバーサルデザインを検討することを目的とする。

学習につまずきのある高校生の英単語学習を題材として,流暢な行動の反復に重点を置いた学習スキルの教授効果を検討することとする。

### (3) 選択的予防で使うスクリーニング尺度

高校中退予防における選択的予防を実施するための,スクリーニング・テストの原案を作成し,その信頼性を検討すること,およびスクリーニングのためのカットオフ値を検討することを目的とする。

上記で作成した尺度に関して,標準化すること,妥当性を検討すること,下位尺度間の分析から高校中退リスクに対するソーシャルサポートの影響を検討することを目的とする。

### (4) 指示的予防としての学校適応支援とキャリア支援

校内連携による学校適応支援と,外部機関との連携によるキャリア支援によって高校中退の指示的予防を行った高校生の事例を報告し,それらの重要性について検討することを目的とする。

高校中退の指示的予防を通じた中退のセーフティネットにより,中退後に社会的自立を達成した事例について報告し,高校中退における指示的予防を進める上で効果的なスクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーの連携,中退のセーフティネットが機能する上で重要となってくる関わりについて検討することを,本研究の目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 普遍的予防としてのソーシャルスキルトレーニング

調査協力者:首都圏に位置する公立高校である A 高校の全学年,全クラスで調査を実施した。計 14 クラスの生徒 394 名を対象とした。

調査内容:先行研究を参考にしながら,調査協力校の教員と協議して暫定項目を作成した。その他,高校中退リスク評価尺度も同時に実施した。

調査時期:2015 年 4 月に調査を実施した。また,再検査信頼性を検討するために,2015 年 9 月にも調査を実施した。

調査手続き:調査票はホームルーム等を利用して,各担任によるクラス一斉方式で配布・回収された。

SST の参加者:SST へ参加したのは A 高校 1 学年の生徒である。

SST 実施の時期:時期は 2015 年 4 月から 9 月にかけてで,月 1~2 回程度の頻度で計 6 回実施した。

調査対象:1 学年の生徒が介入群,2~3 学年は不等価統制群ということになる。

調査内容:で作成したソーシャルスキル評価尺度を実施した。

調査時期:2015 年 4 月と 9 月に調査を実施した。これらは,1 年生に対する SST の事前と事後にあたる。

### (2) 普遍的予防としての学習スキル教育

実験の時期:2017 年 7 月下旬,研究代表者の所属する大学の教室で,放課後に実施した。

実験協力者:関東圏内の短期大学に在籍している学生 15 名(女性 15 名)が実験に参加した。最終的な対象である高校生と年齢が近く,アナログ研究として適性が高いと考えられる。

設定した学習スキル:学習スキルとして「書字反復学習スキル」「3C・誤答反復学習スキル」

「目視・誤答反復学習スキル」の3条件を設定した。

実施時期と時間：2016年8月に実施した。調査全体で要した時間は3時間程度であった。  
研究協力校と実施場所：首都圏に位置する公立の全日制高校であるA高校に協力を依頼し、A高校内の教室を使用した。

研究協力者：A高校を通して、研究協力者の募集を行った。その結果、1名のみの参加となった。

実験デザイン：探索的に効果を検証するため、単一事例実験デザインのABデザインを用いて分析を行った。

(3) 選択的予防で使うスクリーニング尺度

調査協力校および調査協力者：全日制高校、定時制高校、通信制高校の各2校、計6校で調査を実施した。調査は全部で3回実施した。調査1では1,440名の生徒を対象に調査を実施した。

調査の時期：調査1は2013年6月、調査2は同年11月に、各担任によるクラス一斉方式で実施した。また、調査を実施した生徒の年度末の登校状況について、2014年4月に各調査協力校へ回答を求めた。

調査協力者：調査1では、全日制公立高校6校で3,304名の生徒を対象に調査を実施した。調査2では、予測的妥当性を検討するために、調査1で対象とした6校の内ですべての調査協力校4校の内、1,544名を対象とした。

調査の時期：調査1 2016年9月～11月に、各担任によるクラス一斉方式で実施した。調査2 2017年4月に各調査協力校へ回答を求めた。

(4) 指示的予防としての学校適応支援とキャリア支援

事例の概要：事例研究を行った。男子生徒A。本事例は、AがB高校夜間定時制に入学してから卒業するまでの4年間の支援過程である。B高校入試時に中学校より「場面緘黙のため配慮が必要」との申し送りがあった。これに加え、Aは入学後の間もない時期から遅刻や欠席をすることが増え始めた。こうした兆候に対する個別的な早期支援は、高校中退の指示的予防に位置づけられる。

事例の概要：事例研究を行った。16歳の男子高校生Aの事例である。本事例はAがB高校夜間定時制課程に入学してから中退するまでの1年間の支援過程である。Aは1学年の1学期中間考査で多くの赤点を取った。また、同じ時期から学校を休むことが多くなっていった。こうした中退の兆候に対する個別的な早期支援は、高校中退の指示的予防に位置づけられる。

#### 4. 研究成果

(1) 普遍的予防としてのソーシャルスキルトレーニング

暫定項目として収集した18項目について、GP分析、IT相関分析、因子分析を行った。固有値の推移、因子の解釈可能性、下位尺度間の項目数のバランスを参考に2因子構造が妥当であると判断し、因子数を2に固定して同様の因子分析を行った。分析の過程で4項目を削除し、最終的に2因子14項目からなる高校生版「ソーシャルスキル評価尺度」を作成した。内的整合性の点から各尺度の信頼性を検討するためにCronbachの係数を算出した。

係数は本尺度全体で.88であり、関係開始・維持スキル尺度では.89、問題回避・解決スキル尺度では.82であった。安定性の点から各尺度の再検査信頼性を検討するために、2回の調査いずれにも回答した2～3学年の生徒213名の本尺度得点および下位尺度得点について、Pearsonの積率相関係数を算出した。分析の結果、本尺度の相関係数は.71 ( $p < .001$ )であり、正の相関関係が認められた。基準関連妥当性を検討するために、本尺度および下位尺度と、基準尺度であるRASHDとの相関を求めた。分析の結果、本尺度との相関係数は.49 ( $p < .001$ )であり、正の相関関係が認められた。

関係開始・維持スキルにおけるSSTの効果を検討するために、独立変数を群(介入群および統制群)と時期(事前および事後)、従属変数を関係開始・維持スキル得点とする2要因混合計画の分散分析を行った。分析の結果、時期要因の主効果 ( $F(1,324)=8.09, p < .01$ )、および交互作用 ( $F(1,324)=7.48, p < .01$ )が有意であった。そこで、群要因の各水準における時期要因の単純主効果の検定を行ったところ、介入群においてのみ有意な単純主効果が認められ、事前から事後にかけて有意に上昇した ( $F(1,324)=11.91, p < .001$ )。問題回避・解決スキルにおけるSSTの効果を検討するために、独立変数を群(介入群および統制群)と時期(事前および事後)、従属変数を問題回避・解決スキル得点とする2要因混合計画の分散分析を行った。分析の結果、有意な交互作用が認められた ( $F(1,324)=5.29, p < .05$ )。そこで、群要因の各水準における時期要因の単純主効果の検定を行ったところ、介入群においてのみ有意な単純主効果が認められ、事前から事後にかけて有意に下降した ( $F(1,324)=5.60, p < .05$ )。

(2) 普遍的予防としての学習スキル教育

書字反復学習スキル、3C・誤答反復学習スキルおよび目視・誤答反復学習スキルの平均正答数に差があるかどうかを検討するために、独立変数を学習スキル、従属変数を各学習スキルのチェックテスト2回の合計正答数として、対応のある一元配置分散分析を行った。その結果、統計的に有意な主効果が認められた ( $F(2,28)=42.32, p < .001$ )。ボンフェローニの

方法による多重比較の結果、有意水準 5%未満で、目視・誤答反復学習スキルは他の 2 つの学習スキルより有意に得点が高く、3C・誤答反復学習スキルは書字反復学習スキルよりも有意に得点が高かった。次に、書字動作の流暢性の高低により、それぞれに適した学習スキルがあるかを検討した。独立変数を学習スキルと流暢性、従属変数を各学習スキルのチェックテスト 2 回の合計正答数として、混合計画の二元配置分散分析を行った。その結果、学習スキルの主効果 ( $F(2,18)=48.63, p<.001$ )、および交互作用 ( $F(2,18)=3.96, p<.05$ ) が有意であったため、条件ごとに単純主効果の検定を行った。まず、流暢性高群における学習スキルの単純主効果の検定の結果、有意な主効果が認められたため ( $F(2,18)=15.98, p<.001$ )、ボンフェローニによる多重比較を行ったところ、有意水準 5%未満で、目視・誤答反復学習スキルは他の 2 つの学習スキルより有意に得点が高かった。

プレとポストのチェックテストの結果を比較した。プレの 1 回目では、学習に要した時間は 25 分で、チェックテストの結果は 2 点 (意味 1 点、スペル 1 点) であった。プレの 2 回目では、学習に要した時間は 25 分で、チェックテストの結果は 4 点 (意味 3 点、スペル 1 点) であった。ポストの 1 回目では、学習に要した時間は 13 分で、チェックテストの結果は 5 点 (意味 5 点、スペル 0 点) であった。ポストの 2 回目では、学習に要した時間は 8 分で、チェックテストの結果は 4 点 (意味 4 点、スペル 0 点) であった。まず、所要時間について比較してみると、ポストの 1 回目はプレの 1 回目と比較して約半分になっている。同様に、ポストの 2 回目はプレの 2 回目と比較して約 3 分の 1 になっている。一方で、チェックテストの結果はプレの合計が 6 点であり、ポストの合計は 9 点であった。したがって、単語カードを用いて流暢性に重点を置いた反復学習をすることで、英語が苦手な高校生であっても、短時間でより多くの英単語が覚えられることが示唆された。

### (3) 選択的予防で使うスクリーニング尺度

暫定的に集められた 47 項目について、GP 分析および IT 相関分析を行った。その結果、いずれの項目も識別力を有していると判断した。尺度の因子構造を検討するために、調査 1 のデータを用いて探索的因子分析を行った。各因子に含まれる項目数のバランスや因子の解釈可能性の観点から、35 項目 6 因子解が妥当であると判断した。因子分析の結果、残された 35 項目を高校中退リスク評価尺度 (以下、RAS-HD: Risk Assessment Scale for High School Dropout) と命名し、その合計点を RAS-HD 得点とした。内的整合性の観点から RAS-HD および下位尺度の信頼性を検討するために、調査 1 のデータを用いて尺度ごとに Cronbach の係数を算出した。分析の結果、RAS-HD の係数は .90 であり、高い内的整合性が確認された。高校中退の高リスク群をスクリーニングするためのカットオフ値を検討するため、年度末の登校状況を従属変数 (登校群および中退群)、RAS-HD 得点を説明変数として Receiver-Operating-Characteristic (以下 ROC) 曲線を求めた。その結果、RAS-HD 得点 105.5 がカットオフ値として最適であると判断した。よって、RAS-HD 得点 106 点以上を高校中退の低リスク群、105 点以下を高リスク群と定義することとした。

RAS-HD が高校中退における高リスク群のスクリーニング尺度として、将来の中退者を予測していたかという予測的妥当性を検討した。まず、2017 年 3 月時点の登校状況の違いによって、2016 年 9 月~11 月の RAS-HD や下位尺度の得点に差があったかどうかを検討するために、登校状況を独立変数、各尺度得点を従属変数とした対応のない t 検定を行った。その結果、全ての尺度において有意差が認められ、いずれの分析においても、登校群は中退群よりも得点が高かった。RAS-HD には下位尺度に「教員サポート」「親サポート」「友達サポート」という 3 つのソーシャルサポートが含まれている。ソーシャルサポートを活用した予防的介入の知見を得るために、これらがどのように「学級満足感」や「登校義務感」に影響しているのかを共分散構造分析で検討した。モデルの適合度は  $\chi^2(6)=430.01 (p<.001)$ 、 $GFI=.96$ 、 $AGFI=.84$ 、 $CFI=.88$  であり、ある程度の適合度が確認された。まず、「親サポート」が「登校義務感」に対して正の影響を与えていた。同様に、「友達サポート」は「学級満足感」に対して正の影響を与えていた。「教員サポート」は「積極的学習」に正の影響を与え、そうして促進された「積極的学習」は「登校義務感」に正の影響を与えていた。

### (4) 指示的予防としての学校適応支援とキャリア支援

中学校は不登校であった場面緘黙の男子生徒に対し、養護教諭が中心となって支援した。高校 1~2 年次は、個別のソーシャルスキルトレーニングを実施しながら登校を支援した。3 年次は他者とうまく関われないことからストレスが溜まり、行動化してしまうことが増えた。それに対して、面接の中で感情を言語化させる支援を行った。4 年次は外部機関と連携しながら就労支援を行った。最後に、高校中退の指示的予防として、校内連携による学校適応支援と、外部機関との連携によるキャリア支援の重要性について考察した。

入学直後からの学習のつまずきと不登校に対して、スクールカウンセラーによるアセスメントと学校適応支援が行われた。それにより、登校状況は改善したものの学習面での不適応は改善せず、生徒自身が中退を決意した。その後は、スクールソーシャルワーカーが中心となり、外部機関との連携による中退のセーフティネットを整備し、生徒を社会的自立へとつなげた。最後に、効果的な連携や中退のセーフティネットについて考察した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 7件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>小栗貴弘  | 4. 巻<br>7             |
| 2. 論文標題<br>高校中退リスク評価尺度（RAS-HD）の妥当性および高校中退リスクに対するソーシャルサポートの影響の検討 | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部教職実践センター研究紀要                      | 6. 最初と最後の頁<br>33-42   |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                   | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                           | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>小栗貴弘, 工藤仁美  | 4. 巻<br>13            |
| 2. 論文標題<br>高校中退における指示的予防に関する事例研究 連携による学校適応支援とキャリア支援             | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>立教大学臨床心理学研究   | 6. 最初と最後の頁<br>1-13    |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.14992/00017858                    | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                           | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>小栗貴弘, 吉永恵子  | 4. 巻<br>9             |
| 2. 論文標題<br>高校中退の指示的予防を通じた社会的自立の支援 中退のセーフティネットを目的とした外部機関との連携     | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>作大論集  | 6. 最初と最後の頁<br>123-133 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.18925/00001128                    | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                           | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>小栗貴弘  | 4. 巻<br>2             |
| 2. 論文標題<br>高校中退リスク評価尺度（RAS-HD）の開発 信頼性およびカットオフ値の検討               | 5. 発行年<br>2018年       |
| 3. 雑誌名<br>作新学院大学女子短期大学部研究紀要                                     | 6. 最初と最後の頁<br>31-39   |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                   | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                           | 国際共著<br>-             |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>小栗貴弘  | 4. 巻<br>8             |
| 2. 論文標題<br>漢字学習における学習スキルのユニバーサルデザインの検討 - 高校中退の普遍的予防のためのアナログ研究 - | 5. 発行年<br>2018年       |
| 3. 雑誌名<br>作大論集  | 6. 最初と最後の頁<br>147-162 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.18925/00000959                   | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)                          | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>小栗貴弘, 大橋智                                | 4. 巻<br>30          |
| 2. 論文標題<br>高校中退予防としての学習スキル獲得の効果 - 英単語学習における流暢性獲得 - | 5. 発行年<br>2018年     |
| 3. 雑誌名<br>教職研究                                     | 6. 最初と最後の頁<br>35-47 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.14992/00017800      | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)             | 国際共著<br>-           |

|   |                           |
|---|---------------------------|
| 1. 著者名<br>小栗貴弘                                      | 4. 巻<br>29(Special_issue) |
| 2. 論文標題<br>高校生を対象としたソーシャルスキルトレーニングの評価研究 尺度作成および効果評価 | 5. 発行年<br>2017年           |
| 3. 雑誌名<br>Journal of Health Psychology Research     | 6. 最初と最後の頁<br>139-149     |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.11560/jhpr.160523040 | 査読の有無<br>有                |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)              | 国際共著<br>-                 |

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>小栗貴弘                            |
| 2. 発表標題<br>学校臨床におけるスクールカウンセラーと他職種のコラボレーション |
| 3. 学会等名<br>日本家族心理学会 第34回大会                 |
| 4. 発表年<br>2017年                            |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>小栗貴弘                        |
| 2. 発表標題<br>高等学校における「教科指導の配慮や工夫」の充実のために |
| 3. 学会等名<br>日本特殊教育学会 第55回大会             |
| 4. 発表年<br>2017年                        |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>小栗貴弘, 大橋智                                |
| 2. 発表標題<br>高校中退予防としての学習スキル獲得の試み 英単語学習における流暢性獲得とその効果 |
| 3. 学会等名<br>日本LD学会第1回研究集会                            |
| 4. 発表年<br>2017年                                     |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>吉永恵子・小栗貴弘  |
| 2. 発表標題<br>定時制高校におけるSSWとSCの連携による効果的支援-校内支援による中退予防と関係機関とのネットワークによる就労支援の実践報告- |
| 3. 学会等名<br>日本学校ソーシャルワーク学会第11回大会   |
| 4. 発表年<br>2016年   |

〔図書〕 計1件

|                            |                 |
|----------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>竹尾 和子、井藤 元、小栗 貴弘 | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>ナカニシヤ出版          | 5. 総ページ数<br>282 |
| 3. 書名<br>ワークで学ぶ学校カウンセリング   |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



6. 研究組織

|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|